

ドナ R. ファルヴォ 著, 津田 司 監訳

上手な患者教育の方法

塚本 玲三 (名古屋徳洲会病院)

「アメリカの臨床医学は、驚くほど奥行きが深い」というのが、私の本書の読後感である。

最近、わが国でも患者教育が日常の診療においてきわめて重要であることがやっと認識されるようになった。しかし、一般に患者教育は医療者と患者を結び付けるアートで、個々の医療者の人格と感性に依存すると考えられている。本書の著者であるファルヴォ博士は、ベテランの看護婦であり、かつ臨床心理療法士で、長年の経験と深い洞察力に基づいて、患者教育の理論と方法について本書を著している。博士は従来のアートとしての患者教育を、患者教育学という一つの学問的体系を見事に作り上げることによって、より客観性に富むサイエンスの分野に移し変えたと言っても過言ではなからう。約25年前、私がアメリカで臨床に従事している時、Weed博士によって初めてPOSが臨床の現場に導入され、病歴中のpatient profileが病気の罹患や経過に重要な意義をもつことが強制されるようになった。その2～3年後には、精神科以外の一般臨床の現場にも多数の心理療法士を見かけるようになり、医師と症例検討会を行うようになった。これが行動医学の普遍化の始まりである。本書は、行動医学の概念を根底において患者教育の実際を理論的に述べている。そして患者指導に際しての患者へのアプローチの仕方をきわめて分かりやすく具体的に述べている。「患

者教育とは一方的に医学知識を患者に与えることではなく、まず患者の訴えに耳をかたむけ、医師や看護婦等の医療者が患者と情報を交換し、協力して病気に対処することである」という概念が全体を通して強調されている。われわれは理解が乏しかったり、検査や治療に非協力的な患者を「コンプライアンスが悪い患者」といって患者教育の失敗の原因をともしれば患者のせいにしてしまいがちである。ファルヴォ博士はその点について強く医療者側の反省をうながしている。本書の背景には、患者中心医療の理念が描かれており、患者教育の実践には医療者の並々ならぬ忍耐と努力が必要であることが痛感させられる。本書の内容は9章からなり、1～5章は患者教育に必要な基本的概念と理論について記述されている。6～9章には患者とのラポール形成、協力体制の作り方、インフォームド Consentの実際、教材の使い方など、患者教育の具体的方法について記述されている。多忙な方は後半を読まれるだけでも日常診療に有用な知識が得られるであろう。訳文は分かりやすい文体で読みやすく、翻訳文とは思えないほどである。

研修医諸君はもちろん、ベテランの臨床医にも、そして看護婦や臨床心理療法士にも、ぜひ一読をお勧めしたい名著である。

(A5判 302頁 3,605円(税込) 1992 医学書院刊)